福寿草

復刊77号

妙の光（たえのひかり）

春3月、境内の山の斜面に点々と咲く。水仙とともに春の山野草のなかでも比較的早いほうで、これに続いてカタクリ、雪割草、ヒトリシズカ、ニリンソウなどが次々と花開く。

北海道から九州までの山林に自生して、春一番に黄金色の花をつけるところから、新春を祝う意味が名前の由来という。それだけに縁起ものとして江戸時代から栽培され、最近は正月用に鉢植えで販売されていることが多い。

実は妙光寺裏手の角田山には昔から数多く自生していたのだが、乱獲されて絶滅してしまった。残念でならない。この花は角田の里山の自然を復活させたいという団体が、数年前にコンビニの「ローソン」などから補助金を得て、境内の山に植えてくれたもの。

花よりも名に近づくや福寿草　　千代女

通巻97号　復刊77号　2012年3月10日（季刊）　角田山妙光寺　発行　〒953-0011 新潟市西蒲区角田浜1056 TEL 0256-77-2025

行事案内

春のお彼岸中日法要

日　時　3月20日（火・祭日）
　　午前10時半　安穏廟法要
　　11時　春季彼岸法要…本堂
　　12時　おとき
　　（どなたでも当日受付でお申込下さい）
　　午後 1時　　住職法話…大広間

お彼岸は春秋二回、陽気も良くなり昼夜の時間が同じになるこの日、心の偏りをなくして仏様の教えを修行しましょうという古くからの行事です。お誘いあわせて、おでかけください。

春の一日研修

日　時　4月7日（土）
　　午前9時～午後3時半
会　費　4千円（昼食付）
申　込　4月3日（火）までに電話、FAX、ホームページ連絡窓口から

お経を読んでみたい、少しは意味を知りたいという方。数珠の持ち方からお参りの作法など、分かりやすくお教えします。堅苦しいことは一切ありませんので、お気軽にご参加ください。

ご判さま

日　時　4月29日（日）
　　午前8時半受付開始

お説教は、昨秋のお会式（えしき）で大好評でした東京新宿・経王寺ご住職、互井観章師が、あの続きを語られます。
※時間等の詳細は別紙“「ご妙判（みょうはん）」お大会（だいえ）のご案内”をご覧ください。

月例信行会

毎月第一日曜日　午前7時～9時
会　費　千円（各自賽銭箱にお願いします）

予約申込み不用。当日直接お寺へお越し下さい。
お参り、法話、作務、朝粥の朝食、コーヒータイム等があり、交流の輪も広がります。

月例ボランテラ

毎月15日　午前9時～11時半　午後1時～3時

境内の清掃等をお願いしています。都合の良い時間にお越し下さい。昼食はご持参願います。

住職のスライドを使ったお話（一日研修）

本堂でのお経の練習。

暮れのボランテラは、大掃除と仏具磨き。

あとがき

今号から「妙の光」の編集をお手伝いすることになりました。安穏会員の新倉です。私は七年前に、安穏廟の仲間に入れていただきました。お寺に無縁の人生を過ごして参りましたが、妙光寺に出入りさせていただくと、思うところも多く楽しく勉強させていただく毎日を送っております。

「妙の光」を少し変えたい、という御前さまのご希望に応えて、インタビューなどもしてみました。今後とも、よろしくお願い致します。

（新倉理恵子）

戒名の効用

小川英爾

＊戒名は日蓮宗では正式には法号といいますが、ここではわかりやすく戒名とします。

千葉での葬式の帰り、夜の新幹線車内で「ご前さまァ！」と声を掛けられました。スーツ姿で60代の男性が笑顔で立っています。ガッチリした体型で、日焼けしたお顔が酒のせいか少し赤みがかっています。失礼ながらお顔に見覚えはあるものの、とっさにお名前が出てきません。「そうですよね、大勢いられるから名前も覚え切れませんよね。そうそうこれだこれだ」と、差し出された名刺を拝見してびっくりしました。

数年前に安穏廟を求められたHさんなのですが、なんと縦型の名刺の上半分が、雪の積もった妙光寺の本堂のカラー写真です。しかもその下には横書きで「角田山妙光寺檀徒」、次いで「法号」と書かれて妙光寺が差し上げた生前戒名がご夫婦二人分並んでいます。その下に会社名と東京支店の住所。裏にお名前と自宅住所がありました。

驚いている私に「いやぁ、以前戴いた絵葉書の写真があんまりいいんで勝手に使わせてもらいました。さすが仕事の時は別の名刺ですが、親しくなった方には2枚目に渡すんです。そうすると会話が弾んで、妙光寺さんのことや戒名の説明でさらに親しくなるんですよ。」と、大きな声で嬉しそうに話されます。

Hさんは新潟にある土木会社の技術者として若い頃から世界各地に単身赴任され、最近は管理職として上野の支店に勤務。近くの入谷に部屋を借りて週末ごとに新潟に戻る生活とのこと。そういえば今日は金曜日。実は同じ入谷に妙光寺も檀徒さんの所有するマンションの一室を借りていて、私が法事や会議で上京する際に泊まります。初対面のときにお互いの場所を確認しあったら、なんと数軒隣のビルでした。そのうち一杯ご一緒しましょう、なんてお話になっていたのです。その偶然がまた車内でばったりですから、よほどご縁があるのでしょうか。

色々話し込みながら私は昔読んだ本のことを思い出していました。それは、ある小さな町工場の社長さんが、やはり菩提寺に戴いた生前戒名を会社の名刺の裏に書いていたそうです。日々この戒名に込められたお経の意味を忘れずに生きていこう、という自身への戒めのつもりでした。ところがこの名刺にしてから仕事がとても順調にいくようになったのです。「生前に戒名を受けられるような社長なら心配ないと、取引先や銀行から信用が増したせいだったのです。思いがけないご利益に、ますます身が引き締まる思いです」とありました。

Hさんは技術職で営業には役に立たないかもしれません。でも明るい人柄とあいまってのことでしょう、名刺のおかげで人間関係がとてもスムーズにいくようになったそうです。もちろん私が思い出した本の話はご存知ありません。

同じ駅で降りたHさんは「これから息子の車で、施設にお世話になっている女房を迎えに行くんです。それじゃあまた」と、元気な足取りで雪の降る中を夜の駐車場に消えて行きました。とても暖かい気持ちにさせていただきました。

信心

お参りをかさねて

新潟市西蒲区巻　坂爪良子さん（75歳）

坂爪良子さんは、銀行の巻支店長を務めていた佐藤秀夫さん・セイさんの間に、6人兄弟の長女として生まれた。生家は日蓮宗ではなかったが、母が妙光寺深縁の五ヶ浜・遠藤家（P8「ご判様の由来」参照）の末裔で、幼少のころから何かとお題目にはご縁があったという。

24歳の時、三条で親戚の工場を切り盛りする坂爪武臣さんと結婚。翌年待望の第一子を授かるも、生後間もなく、その手に抱くことなく他界してしまった。悲しみの中、光明を得るように続いて娘を授かるが、今度は自分の心臓に病が見つかった。成功確率が50パーセントに満たないという難手術で、受けるか否か迷った。でも、まだ幼い子を残して死ねない。周囲の反対を押し切り手術を決意、無事成功した。その時、「おまけの人生が始まる。これからは人の為に尽くしていこう。」と思い、人生観が変わったという。

昭和49年、巻に現在の家を建てたのを機に、巻駅の〝キヨスク〟に勤め始めた。

同じ頃、新築の家に加茂市から越してきたばかりの義父が亡くなった。法華宗で第一子の菩提を弔った坂爪家だったが、色々な縁があってこれからは角田の妙光寺様にお願いしようと家族でまとまり、先代住職が葬儀を執り行ったことから当山の檀徒となる。

巻での生活が落ち着いてきた頃、夫の身体が変調を来たした。下半身の大やけどと2ヶ所のガンの手術を乗り越えて、懸命に働いていた夫武臣さん。それなのに今度は全身の筋肉が次第に衰えていく、筋萎縮性側索硬化症〈ALS〉の兆しが現れる。徐々に動けなくなっていく難病に、夫とともに向き合った。早朝から駅で働きながら、夫を看病する生活が続いた。しかし平成18年、病状が進み夫は入院。良子さんは7ヶ月間毎日病院に通ったが、今生の別れを迎えることとなった。

こうして、良子さんはお寺に一層関心を寄せるようになった。春秋の彼岸・お盆とお寺の行事に足を運び、お題目を唱えた。現在は巻講中のお経会に入会し、毎月お寺での朝の信行会にも出て信心を深めている。

「いろんな人のおかげでお唱えするようになり、次第に自分が楽になりました。最初はお経のことを教わりたかった。そして繰返し主人の菩提を弔うと、きっと主人も喜んでいると感じるようになりました。お参りを重ねることで相手のことを想うようになったかな。」と笑いながら語る。

「人生を振り返ると、我が子を喪い、実父母・義父母を看取り、夫の介護から看取りまで。私には人に尽くすお役目があったのかも。そんな経験から自分の死が怖くなくなりましたよ。」そう語る良子さんに、これからのことを尋ねると「一日一日を大切に生きる。周りを大切にしていく。もう30年以上もおまけの人生を頂いているんだすけ。」

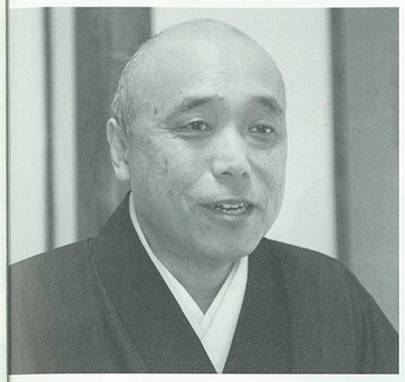
すでに自分の遺影も準備し、保管場所を息子夫婦に伝えてある良子さん。心根の落ち着きが、穏やかにお題目を唱えさせ、さらに信心を深める。こうしてお話を伺っている間も家には来客があり、その度に笑顔で言葉を交わす。これも数々の経験を通しながら、自分の心を磨き続けている良子さんの魅力の賜物（たまもの）だろう。

（取材・構成　永石光陽）

開創七百年記念 身延山七〇〇人大法要によせる思い

小川住職インタビュー

妙光寺では開創七百年を記念して、来年三月に「身延山七〇〇人大法要」を実施する予定です。妙光寺に縁を結んだみなさんと共に、総勢七〇〇人で身延山参拝を行おうというのです。妙光寺始まって以来の壮大なこの計画に込めた思いを御前さまに聞いてみました。



――七百年の歴史を、どんな風にふりかえっていらっしゃいますか？

ここ角田浜は、日蓮聖人が佐渡に配流される際に立ち寄ったゆかりの地です。妙光寺の歴史は、正和二年（鎌倉末期一三一三年、日蓮聖人の入滅から三十一年目）に、日蓮聖人の孫弟子にあたる日印上人によって創建されたことに始まります。来年二〇一三年には、開創七百年を迎えることになります。

この七百年の歳月は、決して順風満帆なものではありませんでした。住職がいない時期もありましたし、江戸時代中期には、五十年の間に二度の火災にも見舞われました。先代の住職であった私の父は、戦中と戦後の激動の時代を妙光寺で過ごしました。寺は農地解放で農地を失い、財政的にも大変厳しい時代が続きました。境内は排水が悪くて二、三年に一度は床下浸水にあいました。父を始め歴代の住職と檀徒のみなさんの苦労の上に、開創七百年の今があると思うと、本当に感慨深いものがあります。

――御前さまも、今年は還暦を迎えられるんですね。

私は、父の亡きあと、二十二歳で住職になりました。私が住職になってからも、寺の財政はひっ迫し、みなさんには何かにつけて寄付をお願いする状態が続きました。二十年ほど前、妙光寺は「安穏廟」という新たな挑戦もはじめました。それは、今までの歴史と伝統の上に、新たに何かを積み上げる挑戦でしたが、幸い今妙光寺には、檀徒さんに加えて新たに支えてくださるみなさんが多数集まっています。多くのお力添えをいただいて、新しい客殿、本堂を建て、境内の整備も行いました。そして妙光寺は、開創七百年を記念した「身延山七〇〇人大法要」を計画できるところまで来ました。

今年還暦を迎える私は、住職になって三十八年目になりました。来年六十一歳の年に、妙光寺の開創七百年を迎えるのは、まさに仏様のお導きだと思います。

――七〇〇人大法要を計画されたのは、なぜですか？

妙光寺の開創七百年を、どんな形でお祝いしていくかについては、数年前から考えてきました。こういうとき、多くのお寺では、新しく建物を整備したりするのですが、それはもうひと通り終わっています。妙光寺が今行うべきことは、目に見えないものを創っていくことではないかと思いました。

七百年に七〇〇人が集まり、「私たちは、同じ妙光寺につどう仲間だ」という連帯感を創りあげること。そんな心の核――求心力をもった寺になりたい、と思ったのです。

では七〇〇人がどこに集まるのか、新潟のホテルでパーティーをするのか、とも考えましたが、妙光寺ならではの場所にしたい、それなら身延山しかないということになりました。身延山の総本山にご相談したところ「七〇〇人の法要は十分にできる。一ケ寺で行うのはあまり例がないので、大歓迎です。」とうれしい返事をいただきました。

身延山という霊地に、妙光寺で縁を結んだ人たちが一堂に会し、七百年の歳月を刻んでこれたことへの感謝を報告し、これからも共にがんばっていこうと決意する集まりにしたいと考えています。

――連帯感を創らなければ、と感じることがありますか？

葬儀や法要にうかがうと、集まる親族などが減っていることを実感しています。家族、血縁、地縁のつながりが、どんどん薄くなっているのです。その中で、ひとりぼっちで悩んだり、小さなことで落ち込んだりしている方に出会うことが増えています。悩みや困りごとがあると、お寺に相談に来てくださる方も多くあります。妙光寺を頼ってくださるのは、大変うれしいことです。

しかし、私ひとりでは解決できないこともたくさんあります。むしろ妙光寺を核にして、檀信徒のみなさん、安穏会員のみなさん、妙光寺を支えるみなさん同士につながってもらいたいのです。

妙光寺は、みなさんに支えられて今日まできました。そんな妙光寺を取り巻く人の輪を、再確認し実感する場をもちたいと思って、この「開創七百年記念身延山七〇〇人大法要」を計画しました。

――佐渡の『鼓童』も参加してくださるそうですね。

相談した役員の中から、「せっかくの七百年大法要なのだから、それなりに感動のあるものにしてほしい」という声がありました。そこで、妙光寺にご縁のある音楽を加えてはどうかと思いました。

実は、佐渡の和太鼓集団『鼓童』の関係者の中に、安穏会員を経て今は檀徒になっている方がいます。その方に相談したところ、大法要の際に大太鼓と笛と踊りを奉納したらどうか、という話になりました。『鼓童』の本拠地・佐渡は、日蓮聖人のご縁の深い所ですし、大変いい案だと思いました。『鼓童』のみなさんも、海外公演の日程を調整して、参加してくださることになりました。ですから、大法要は『鼓童』とのコラボレーションになります。私が導師を務め、式衆の僧侶も三十人ほど、身延山から参加してくれます。さらに、関わりの深い寺のご住職や各地の友人のご住職にも声をかけます。心に残る素晴らしい法要にしたいと、思っています。

――七〇〇人の法要というのは相当大変だと思いますが、いかがですか？

七百年記念に七百人というのは、最初は語呂合わせのようなアイディアでした。でも、考える程にいい案だと思えてきて、今はぜひ七〇〇人の方に参加していただきたいと思っています。費用もどなたでも参加しやすいようにしたいと、旅費実費の約半額はお寺の基金の一部を取り崩して支出することにしました。

従来の檀徒さんのご家庭からは、最低お一人はご参加いただきたい。できたらお二人参加してくださらないと、七〇〇人にはなりません。安穏会員にも、またそのご家族にも、妙光寺に縁のあるすべてのみなさんに、ぜひ参加していただきたい。仏様の前では、みな同じ妙光寺の仲間なのですから。

――御前さまには、なみなみならぬ決意があるということですね。

はい。私も住職になって、四十年近くが経ちました。先も見えてきたように思います。この「七百年記念大法要」は私自身のこの四十年の一つの集大成だと考えています。妙光寺につどうすべてのみなさんと共に、これに臨みたいと思っています。よろしくお願い致します。

どうもありがとうございました。

（聴いた人　編集部・新倉理恵子）

角田山妙光寺
開創七百年記念
身延山700人大法要

◆期日
平成25年3月16（土）17（日）
◆費用　お一人　1万2千円
◆宿泊
八ヶ岳ロイヤルホテル
＊新潟県内各地と関東地区からバスが出ます。
詳細は別紙をご覧ください。

寺のうごき

冬〜春へ

雪の多い冬でした

❶吹雪の日、本堂もかすんで見えます。
❷快晴の空に白銀がまばゆい境内。
❸除雪に檀徒の農家からトラクターを借りました

節分ではありません。ボランテラの方々の忘年会が「なまはげ」出現で大いに盛り上がりました。

「厄払い」は2日間で50名が申し込まれました。

除夜の鐘

子どもの撞く鐘の音は、なぜかとても澄んだ音に聞こえます。

整理券を配り、10人ずつ順に並びます。

「子供にせがまれて来ました」という家族連れが多いです。

桜の花は川沿いが映えます。

本堂前の枝垂れ桜。

境内に自生するヤブツバキ。

ヒトリシズカは、文字通りひっそり咲きます。

新緑の境内で「ご判さま」のお練り

4月29日「ご判さま」法要は、新緑の下で雅楽を先頭にお練りから始まります。

角田山妙光寺インフォメーション

『ご判さま』の由来

日蓮聖人が遺された『ご判さま』

日蓮聖人が文永8年佐渡に島流しに遭われたとき、鎌倉幕府から来た護送の役人が遠藤左衛門尉藤原正遠という武士でした。遠藤氏は日蓮聖人と身近に接するうちに信者となります。3年後日蓮聖人は鎌倉に戻られますが、遠藤氏は高齢のため佐渡に残りました。その際日蓮聖人は遠藤氏のお世話に感謝して、「霊山浄土（あの世のお釈迦様の下）で再会しましょう」と、約束に印鑑を遺されたのです。

以来その印鑑は遠藤家の家宝として護られてきました。のちに遠藤家の13代目が妙光寺の隣村、五ケ浜に移住し、当時衰退していた妙光寺の復興に尽力されました。遠藤氏にあやかって、法華経信者がこの印鑑を押した『遠藤殿御書』というお手紙の写しを携えて棺に納められる習慣は今も続いています。

『ご判さま』ご開帳行事

この『霊山契約の御判』と呼ばれる印鑑を、毎年4月28日に遠藤家から妙光寺へお運びし、参詣者にご開帳してきました。県内外各地からのお参りの信者のために、27日朝から28日のお迎えまで、文字通り夜通し途切れることなく法要と説教が続けられました。往時は大きなお祭りとして近隣の信者以外も集まり、堂内境内ともに人で溢れました。

近年は熱心な信者も減少し、農作業の時期が変わったこともあり、4月29日一日限りの行事として継続しています。

『稚児行列、水行』

当日は県内各地の信者が参拝する中、昔ながらの行列は新緑の木々の下を、雅楽の演奏を先頭に稚児、式衆の僧侶、そしてお輿と続きます。本堂での大法要の後、寒百日間の荒修行を終えた修行僧による「水行」も行われます。

奉納他、受付します

当日の混雑を避けるため、檀信徒には事前に修行僧による祈願、大法要での回向、施餓鬼塔婆の申込書をお届けします。お申し込みください。

昭和13年頃、境内には露店が立ち並びにぎやかでした。

昭和13年頃「ご判さま」の住職説教。

最近の住職説教の様子。

参道の植栽整備計画

来年の妙光寺開創七百年の記念事業は、ご案内のとおり身延山での700人大法要を主体とします。関連して昨年整備した参道の両側に木を植える工事を予定していますが、現状で総額約1千万円の経費の目処がついていません。役員会議では昨今の経済事情を考慮し、また身延山での700人大法要に参加いただくことで負担をおかけすることから、全檀徒に対する直接のご寄付のお願いはしないことに決めました。

植栽整備の計画に変わりはありません。これまでに篤志の方のお申し出もあり資金は積み立ててあります。また「植栽の話はどうなりましたか?」とのご心配の問い合わせも戴いています。

今後も引き続きご協力いただける方のお申し出をお待ちしますので、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

紙上法話　小川英爾

「我れ深く汝らを敬う」　妙法蓮華経・常不軽菩薩品第二十

先日、探し物の途中で古いタンスの中から偶然見つけた一幅の書があった。『我深敬汝等　日琢』とある。日琢とは故綱脇龍妙師のことだとすぐに思い出した。50年余り前、先代住職が敬愛していた綱脇師を妙光寺にお迎えした際に書かれたものと思われる。なぜ表具されずにいたのかわからない。早速表具店に依頼した。綱脇師は当時80歳を越していたが、きりりとした風貌で、文字どおり慈愛溢れる笑顔の持ち主だった。当時10歳前後だった私は父に促され、綱脇師に、頭をなでていただいた。その記憶は、今もしっかり残っている。

綱脇師は明治時代後期、当時は治療法のない伝染病として恐れられたらい病の患者を救済する施設を身延山に作られたことで知られている。当時らい病は遺伝するとか血統だと信じ込まれ、患者の出た家族は不名誉で周囲からも忌避されるので、患者は家族からも見放された。社会福祉のない時代のこと、患者は各地の大きな寺の門前に集まり、参詣の信者に物乞いをして生き、死を待つしかすべはなかった。

僧侶の修行を終えたばかりで、その報告のお参りに身延山に来た若き綱脇師は、門前に集まった患者を見過ごすことが出来なかった。思い悩んだ末救済に立ち上がり、その生涯を費やすことになった。時の身延山法主（総本山の住職）の力を得、患者たちが掘っ立て小屋を建てて雨露をしのいでいた身延川のほとりに、仮の病室を開設し13名を収容したのが明治39年のこと。こうして日本最初の救らい患者施設は、先述のお経の文から『身延深敬園』と名づけられた。

施設はできたものの患者の毎日の食事から薬代まで、その全ての運営費用が綱脇師の肩にかかる。偏見による様々な迫害もあるなか必死になって各地を歩き、お寺から信者から浄財を仰ぐ毎日、その苦労は筆舌に尽くしがたかった。やがて時代も変わり、行政の支援も得られ、治療法が開発され病に対する理解も広まり、国立の施設も開設されるようになった。以来60年間で『身延深敬園』では総数千数百名の患者を収容してきた。

お経に、「常不軽菩薩」は出会う人すべてに対し、一切の差別する心を持つこと無く手を合わせ拝むように挨拶したと説かれている。例え石をぶつけてくる人に対しても、「誰もが仏になれる素質を持っている。だから私はあなたを深く敬う。」と言った。徹底した人間尊重、生命尊重の精神である。綱脇師はこのお経の言葉通りにらい病患者に尽くし、昭和45年95歳で仏様の下に旅立たれた。その後施設は救らいの役目を終え、高齢者施設として娘の美智さんに引き継がれている。

私にとってこのお経文の一説は、頭をなでていただいた感触と綱脇師の生涯が重なり合い、いつも心に響いてくる。

あんのんのページ

「家族葬」と「生前契約」

「家族葬」ってなんだろう

いま社会は、核家族化と高齢化がすすんでいます。故人の親族が少ないうえに高齢、しかも遠方に居住ということで葬儀の参列者が少ない。また新興住宅地で近隣との交際もないし、普段から親戚付き合いも少ない。仕事も引退して関係者もいない。こうした背景から葬儀がごく限られた人数になり、家族だけで行われる葬儀が増え、これを「家族葬」と名付けたようです。

これには従来ありがちだった形式的で経費もかかる葬儀をやめて、交際費を節約したい気持ちから、周囲に知らせず家族だけで行うという目的もあるようです。形式張るのは嫌だから、親しい家族で心を込めて見送りたい、見送られたいのは理解できます。でも単に遺族の都合で安価に簡単にというのは寂しくないでしょうか。故人のこれまでの様々な関係に配慮する思いやりはあってほしいと願うものです。

実は家族葬は香典が入らないだけに、支出ばかりで決して安価には上がりません。またそれを売り物にする葬祭業者も多く出ていますが、手抜きで安くするとも、また追加料金で結局高くなるとも聞いています。葬儀の基本には〝お互い様〟の精神で、大変なときにお金によらず支え合うところがありました。そこが薄れてきているのです。

元気なときに自分の葬儀について家族で話し合い、知らせて欲しい人を伝えておくことが大切で、遺された家族も一番助かります。経費や形式に疑問があれば遠慮なくご相談ください。妙光寺では参列者1人の「家族葬」から、150人の「大規模葬」までできます。

「生前契約」をご存知ですか

妙光寺では「葬儀の生前契約」をお受けしています。本人と契約し、遺族に代わってご遺体の引き取りから関係者への通知等、葬儀一切から埋葬までを執り行います。県外居住の方を含めかなりの件数になっています。法的に有効な書類に基づき経費を預かりますが、本人限定で解約希望にも応じ返金もします。既に何件か執行していますが、これまで解約申し出はありません。見積の都合上、会場は妙光寺で行います。県外居住者の場合はご遺体を搬送するか、居住地で火葬してからになります。

私たちは死後、各種保険の解約、年金等行政の手続き、住居の処分等々膨大な作業が必要です。親族に頼れない事情から、これらの代行を引き受ける「死後の事務手続きの生前契約」を希望する人が社会では増えています。今のところ「任意後見制度」を使って、弁護士や司法書士等の専門家に依頼する方法が有効のようです。ご相談は妙光寺でもお受けしています。

寺庭から

「暖かい関係」 小川なぎさ

大雪で今年ほど大変な冬はなかったと思います。私も除雪をしながらお一人で生活なさっている皆さんのことを考えていました。でもあと少し、春はすぐそこです。

2月、寺も雪がたくさん積もりました。そんなある日のことです。地元角田浜の檀徒さんが集まるお経の会の、年に一度の食事会がありました。6年前に始めた若い世代の会もありますが、それとは別の『お講』という、昔からの親世代の集まりです。若い方が当番で集まり、買い出しから昼食つくりまでまかなっています。その『お講』の記録帳が昭和37年から残っています。そこから昭和40年の記録を紹介します。

去る3月5日夜岩屋前「ホテル角田」の火災の際、妙光寺に火の粉が飛び来たり、近火見舞いの酒を貰ったので、本日お講の酒は寺より見舞いの酒を出す。酒代で魚を買うて賄う。

先代住職の記録だと思われます。走り書き程度のメモでも、当時のあり様が目に浮かびます。また世代は代わっても、昔からの家ごとの屋号が今も同じく残っていることに、心がホッと温かくなりました。

「お講」の昼食会。当番制で若い世代が作り、皆でいただきます。

50年後のこの日の『お講』の食事会も和やかで、笑顔のあふれる楽しい一日でした。それにしても岩屋前「ホテル角田」とは気になります。どんなホテルでまた現在のどこにあったのか？　ご存知の方は今度教えてください。

◆

この冬、浄土真宗のお寺の坊守さんたちと話をする機会があり、同じ宗派の人とでは語れない本音の話ができたことが最高の勉強でした。私も寺庭夫人としてそれなりに頑張ってきたつもりでしたが、次期住職婦人への交代があると思うとどこか気持ちが引いてしまうことがありました。でも真宗系の彼女たちの寺に骨をうずめる覚悟、子を跡継ぎとして育て、それでもなお男社会である寺で自分の存在意義を求め続けている姿に感動しました。

あと何年この仕事ができるのか分かりませんが、与えられた本分を誠実にこなしてゆく。そんなことを思った冬でした。頑張らなくては！

人間同士、裏も策略もないさわやかな関係は、まさにお寺という場所では簡単に作れます。私もそんな暖かい関係のなかで、育てていただきました。今年もみんなでほんわかとやっていきましょう。

お花見の頃から、主に週末に院庭でお茶コーナーを出そうと思っています。寺においでのときは一服休んでいってくださいね。